



岩手県陸前高田市一本松近くの草花に囲まれた瓦礫集積所の風景。
「Stitch」vol.9 中表紙より。(2013年8月/提供Stitch編集部)

もりおか復興応援フリーマガジン「Stretch」は、東日本大震災から半年経った2011年9月に盛岡から復興を応援するために創刊しました。「Stretch(ステッチ)」とは、一針一針つなぎ縫い合わせることで。当初は、岩手県盛岡市にある「もりおか復興支援センター」の情報発信と被災地から盛岡へ避難してきた方向けに生活情報を届けることを目的としていました。配布先も盛岡市内に限定していました。しかし、震災から2年を機に震災風化を実感するようになったことから「被災地の情報を発信する」内容にシフトしました。今の「Stretch」は、被災地で活動する人の様子を特集するほか東日本大震災を学ぶ「311を知る」シリーズや三陸グルメを紹介する「三陸うまいもん紀行」、被災地や岩手と関わりのある著名人のインタビューを掲載しています。ただ情報を伝える



盛岡発「Stitch」は、現在全国で配布サポーターを募集中。

避難所に指定されていた市民会館の前。翌月からの本採用を控えた市の臨時職員として避難誘導にあたるその表情は、誇らしげだった。

あれが、最後に見た姿だった。「なぜあの時一緒に車に乗せてこなかったのだろう」「なぜ避難所だからと安心してしまったのだろう」「なぜ、私は生きざいのだろうか」。悔やみきれず、自分を責める言葉ばかりが浮かんでくる。どうしても会いたい、眠れない日が続き、呼吸困難を繰り返した。

陸前高田市の浅沼ミキ子さんは、東日本大震災で息子の健さん当時25歳を亡くした。多くの人が避難した、3階建ての市民会館は津波で水没。助かったのは十数人だけだったという。

「今でも、泣けて仕方ないときがあるんです。今日もね、左

しんだよ、怖いんだよ、って伝え
たかった」。

当時は「どうしてこの気持ち
が伝わらないの?」と思っていた
という浅沼さん。だけど、今はわ
かる。「伝えたい」気持ちを押し
付けても、受け取る人に届かな
いということ。そして、文章を聞
き、推敲を重ねて完成した絵本
は、文字は少なくても思いのす
べてがつまっているということ。

2013年5月、およそ2年の
歳月をかけた出版された絵本「ハ
ナミズキのみち」は、子どもと
の健さんの目線で見られている
「大好きな町。大好きなけしき」
で始まり、絵本作家・黒井健さ
んのやさしい絵とともに、ふるさ
との風景や家族との思い出を語
り…そして、震災の日を迎える。

あ のとき…。

そのたつたひと言の文章と、見
開きいっばいに描かれた、地震に
襲われるまち。ページをめくると
まちを呑み込む津波、そして

「ハナミズキには『私の思いを受けてください』『返礼』という花言葉があるんです。健だけじゃない、津波で亡くなった人たちの、そして生き残った私たちの思いをハナミズキの花に変えてこのまちをずっと見守ってほしいなあって。」

後世に「みち」を伝えたい

本を出版してまもなく、浅沼さんは震災後に始めたボランティアの仲間たちと「陸前高田『ハナミズキのみち』の会」を立ち上げた。

『ハナミズキのみち』
(金の星社)

文／浅沼キ子
絵／黒井健

ハナミズキ

みち



陸前高田
 『ハナミズキのみち』の会
 現在、シンボルロードに街路樹としてハナミズキを植樹する事についての賛同書を募集中。賛同書を希望する人は、下記アドレスへメールすると様式のPDFを返信するとのこと。
 hanamizuki_rikuzentakata
 @yahoo.co.jp

フェイスブックページで情報を発信中
<https://www.facebook.com/hanamizukinomichinoHui>



FREE
PAPER

岩手県

もりおか復興応援フリーマガジン「Stitch」
岩手県盛岡市から三陸沿岸の情報を発信。
人と人、地域と地域をつなぎ、復興へと向
かう人たちを応援するフリーマガジン。岩手
県内を中心に全国へ向け2万部発行。

発行元：ラヂオもりおか
〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通1-1-21
*TEL 019-621-7110

岩手 盛岡発！
震災復興応援
フリーマガジン
「Stitch」
支える気持ちをつなぐ
「フリーマガジン」として

日本の出来事として知ってもらいたい」そう想って現在は盛岡市内中心部だけではなく、県内県外へも広く配布を行っています。身近な情報発信のツールとして「Stitch」を利用して欲しいと「ステッチサポーター」の取り組みも始めました。サポーターの方々には、ボランティアとして冊子の配布をしてもら

浅沼ミキ子さん
（陸前高田「ハナミズキのみち」の会）

今も、泣けて
仕方ないときがある

「山の方へ行つてから」。指差

が、児童図書編纂者で作家の野上皓さん。しかし、浅沼さんの原稿を読んだ野上さんの反応は「このままでは絵本にできない」というものだった。

「悲しいね、で終わってしまったら意味が無い。子どもたちが読み終えた後、この物語にどう寄り添えるかが大事、つておっしゃ

町の人たちが もう二度と
津波でかなしむことが
ないように、
ぼくは木になったり
花になつて
みんなを
まもつていきたいんだ。

浅沼さんは健さんの思いを、
絵本のなかの「ハナミズキのみち

命があります」。

伝えなきゃ、残さなきゃと思っ
たから、私も今まで生きて来れ
たの、と話す浅沼さん。

土地区画整理事業はまだ計
画の段階。シンボルロードに並
ぶハナミズキの風景をすぐに見
ることはできない。けれど、この
絵本を読んだ子どもたちの心
の中に現れる「ハナミズキのみ

高台へと続く、避難路を兼ねたシンボルロードに、ハナミズキの植樹を実現させることが会の主たる目的。しかし、シンボルロードの整備は復興に向けた市の土地区画整理事業のひとつで、着工されるのはまだ先の話だから今は、市に植樹を検討してもらえるようになるべく多くの賛同者を集めることを目標としている。

「震災で、本当にたくさんの方が無念な思いを残して亡くなつてしまいました。生き残つた私たちは、亡くなった人たちの思いを引き継ぎ、二度と同じ悲劇を起さないよう後世に伝える使

A colorful illustration of a woman with brown hair tied back, wearing a white cardigan over a blue polka-dot dress, sitting on a red sofa and reading a book to a young child with blonde hair. The child is wearing a blue dress with white polka dots. The book is open, showing a page with various colored shapes and letters. A red and white checkered pillow is on the sofa next to them.

特集
宮城、岩手、福島の復興マガジン発
**それぞれの今、
分かち合う課題**

震災からもうすぐ3周年を迎えます。震災直後とは支援の形や求められることは大きく変わりました。人の気持ちや生活も変わってきています。フリーマガジンのこれらの役割は、震災風化防止のために広く濃く人に訴え続けること―盛岡のこころには同じ岩手県の出発点として

「二度と津波で
悲しまないよう」に

やとまでい。そして、津波への怒りや大切な人を亡くした悲しみを、書き込め、夢中になつて原稿を書いた。

自費出版するつもりだったが、そのころ開設準備をしていた市内の仮設図書館「虹のライブラリー」のスタッフに「オープンニングセレモニーに作家さんや出版社の

津波が来たとき、
みんながあんぜんなところへ
逃げる目がある。

今は、市に植樹を検討してもらえようなるべく多くの賛同者を集めることを目標としている。

「震災で、本当にたくさんの人が無念な思いを残して亡くなっ
てしまいました。生き残った私
たちは亡くなった人たちの思い

11



WA
WA
NEWSPAPER
わわ新聞

人と人との心をつなぐ
コミュニティ新聞

岩手県、宮城県、福島県にて、発行。

1 **特集** 岩手・宮城・福島の復興マガジン発
それぞれの今、分かち合う課題

4 「わわの輪」 ものづくりの輪 その2

6 「わわのひと」インタビュー コラム:「うたうひと」がうまれるまで

8 「わわの写真」 vol.1
変わらない風景、始まりの風景

東北では「私」のことを「わ」と発音する。
多くの「わ」が大きな「わ=街」をつくりあげる事を願い
「わわ」プロジェクトと名付けられました。

ただけではなく、読み物として価値あるものを目指し、表紙・デザインにすいどう工夫しています。さまざまな人が「支援する気持ち」を忘れずに持ち続けられるようにと願いをこめて、岩手の復興を見つめながら制作しています。

— Sticth 寄稿記事 —

る、伝える、残す

3・11を経て今を生きる私たちが、
未来のためにできること。

沼さんは言う。大切な人を突然失くした悲しみ、むなしく、そして、津波に対する恐怖や怒りは、ずっと消えない。だから「もう誰にも同じ悲しみを味わつてほしくない」。その思いはきつと、天国にいる健さんと同じだ。

の深い悲しみを代弁していた。
しかし次のページでは、白やピンクのハナズキのなかで、健さんが語りかける。

もう泣かないで。
楽しかったことを思い出して
わらっていいね。

まほは、ここから見ているから

高台へと続く、避難路を兼ね



震災に伴う福島第一原発の事故は、子どもを持つお母さんと将来子どもを産み育てる女性に大きな不安とストレスを与えました。

しかし、ただ泣いているばかりではなく、震災直後から動き出した女性たち。悩み、時間をかけて考えた末、動き出した女性たちがいます。

一人ではできなかったことも繋がれば力になる。女性だからこそできること、母親だから分かることを活かして、ささやかだけれど幸せな日常を目指して、あらかじめ活動を続ける女性たち。今の子どもたち、そして未来の子どもたちのために、お母さんと女性たちは少しずつしなやかに前に進んでいます。

女性のちから

必要なことは
自分のことと
向き合うこと

『ははのわ』 福島市飯坂町

福島市飯坂町を中心に活動する子育てサークル「はなのわ」にお母さんたちが気軽に集い、話し合える「おしやがりカフェ」や芋煮会の開催、2012年9月には、自分たちの足で、各地の線量を調べて「飯坂町の公園・児童遊び場放射線量マップ」を完成させるなど、お母さんのためのお母さんによる活動を活動を活発に行なっています。何故このような活動を始めたのか、これまでの歩みで気がついたこと、これからについてのことをお伺いしました。

放射線との
戦いではなく、
問題は考え方の
違いでした。

代表の菅野恵子さんの呼びかけで集まった『ははのわ』初期メンバーの数人で、『飯坂町の公園・児童遊び場放射線量マップ』は作られました。ふくしま協働まちづくり事業として福

島市の協力を得ていますが、実際の制作はお母さんたち。子どもを背負いながら、公園など子ども遊び場を中心に飯坂の放射線量を100箇所近く調査し、それを手書きの地図にまとめて完成させました。

震災から1年が経った時「私はこの1年、震災復興の為に何かをしただろうか。」と思いたった菅野さんは、自分と同様に不安を抱えながら生活をしているお母さんたちが気軽に集い話し合える場を作ろうと『ははのわ』を立ち上げました。

「子どもを外で遊ばせたいのに、周りの目が気になったり、お母さん同士や家族との意見の違いにストレスの限界を感じていた頃、チャシを見て、これだ！」というのは、メンバー第一号となった佐藤さん。

活動の中で
自分の基準を
作ることができた。

自分たちで調べたり、話し合いの中で様々な意見を交わしたりするうちに、各々自分の中に放射線量に対する基準ができたといいます。

同じ放射線数値を見せられても、危ないと感じるか、大丈夫と思うかは人それぞれ。その基準が曖昧で、その都度周りの意見や報道で揺れてしまうことがストレスに繋がります。

「この土地で生きる私たちは、



「ははのわ」代表の菅野恵子さん(左)。佐藤朋子さん(中央)、名倉真美さん(右)。



「吹く島」最新号では2013年10月にマンハッタンで行われた「ニューヨーク福島祭」を特集。

『ははのわ』

震災、原発事故から1年後に発足した福島市飯坂町を中心とした、未就学児の子供を持つ母親たちのネットワーク。未就学児をお持ちの方でしたら福島市内、市外関係なくどなたでも参加できます。

<http://www.geocities.jp/hahanowa2012/index.html>
hahanowa@gmail.com

芋煮会や運動会、楽しみながら、自分たちの手で少しずつ現状を変えていこうとする『はのわ』。モヤモヤとあきらめの日々を過ごすのは、一度彼女たちの活動に触れてみてからでも遅くはないかもしれません。

※吹く鳥 vol.6より転記

『吹く島』ができるまで

東日本大震災が発生し、福島県福島市でも未だかつて経験したことが無い非常に大きな地震に見舞われ、ライフラインや交通機関は麻痺し、損壊した古い建物や塀も少なくありませんでした。多くの帰宅困難者が発生するなか、福島市街地で飲食店を経営する自営業者が地域FMで炊き出し活動を呼びかけ、震災当日深夜に炊き出し活動を実施しました。その時集まったメンバーが後にNPO法人福島ライフエイド（吹く鳥発行元）の中核を担うことになりました。

翌日から、福島県沿岸部からの避難者を対象に大規模な炊き出し活動を実施して4月中旬までおよそ2万食を提供しました。その後、時間が経過するにつれて、時刻と変化し、多様化

れていく被災者のニーズに、継続的に応え支援するたために、平成23年6月に法人化を果たしました。


年が変わって平成24年、原子力災害の影響で福島県からおよそ6万人が県外へ自主避難したと報じられました。なかでも自主避難避難者が多く生活する山形県栗原市には、自主避難者の子どもを保育する場を核としたコミュニティがそれぞれに形成され、当法人がそれぞれの福島市街地の屋内遊び場と連携し、協働するとともに活発に情報交換を行いました。

その中で問題視されたのは、自主避難者と福島で生活し続ける者との、情報の格差を原因とした温度差や感情的なすれ違いでした。そこで当法人は、福島と自主避難者間、及び被災地域以

外の地域との共有コンテンツ、特にインターネット等の知識や端末を必要としないうる媒体の情報誌『フリーペーパー』の必要性を感じ、『吹く島』の刊行を決意し、平成24年6月の創刊から現在（平成25年12月）まで隔月で10号を発行しました。

東日本大震災からもうすぐ3年が経過しようとしています。福島・帰還する自主避難者も多く見られるようになりましたが、自主避難の原因となった原子力災害は収束されたとは言いがたい状況です。ちょうどこの3年目ですが、今後『吹く島』が誰に対してどのような支援を行うべきかもう一度立ち止まって考えるための大きな節目になるのではないかと考えています。

（吹く島 編集部：齋藤正臣）



● お母さんによるお母さんのための
● 支援団体をご紹介します。



hand to hand project
kawamata ～小手郷～

子供の被ばく量をなるべく低くしたい、特に内部被ばくをさせたくない取り組みとして、有機無農薬野菜や完全無農薬愛媛みかんなどの共同購入を開始。また、2014年はサロンを開きます。詳細はHPに掲載予定です。

【参加方法】川俣に限らず近隣の方の加入も随時受け付け。会
員制：年5,000円、賛助会員一口1,000円から。

【お問い合わせ先】
TEL:090-7665-7269(今泉)
E-mail:hand.to.hand.project.kawamata@gmail.com
http://hand-to-hand-project-kawamata.jimdo.com/



@homeママーズ

福島在住のママ、県外避難先で頑張るママと一緒に歩む。「一人じゃないよ、そばにいるよ」お互いにそんな思いで相談、情報交換、イベント告知などを通じて交流していきましょう。

【参加方法】メールにて登録(53019615@ra9.jpに空メール)
ママ達のお話会、癒しイベント、子供お遊び会など予定してい
ます。随時、メールにてお知らせ致します。

【お問い合わせ先】
TEL:070-5320-4724(沢田)
E-mail:ryoga-s2000@kra.biglobe.ne.jp



おたがいサマーマ

もっと気軽に放射能や保養の事など話したいママ達の為に不定期でコミュニティカフェを開催。地元で子供を放射能から守るべく頑張っているママ、自主避難から戻ってきて不安なママなどが参加。

【参加方法】メールにてお問い合わせください。

【お問い合わせ先】
E-mail: mama.koriyama2012@gmail.com
<http://www.facebook.com/samamainkoriyama>



山形避難者母の会

山形市を拠点とし、母子避難者・避難ママを対象に当事者のみで構成。福島県や政府などへの要望などを避難当事者から発信する。また、昨年から避難ママのための拠点である「村山地区ふくしま子ども未来ひろば」を開所。

【参加方法】お名前、現在在住の市町村、避難前に在住の市町村、家族構成、お子様の名前、学校名を下記メールアドレスへご連絡ください。
【お問い合わせ先】山形避難者母の会事務局

〒990-0044 山形県山形市木の実町8-3日本興亜山形ビル4F
(村山地区ふくしま子ども未来ひろば内) TEL:023-600-7167
E-mail: yamagatahinanhaha@gmail.com
<http://yamagatahinanhaha.jimdo.com>

各地域で活動する人やプロジェクトに
焦点をあててそこから生まれる新しい
「つながり」の可能性に向けて。

の輪 ver.11

デザイン力で定番化 次の新作にも期待 石巻工房

オリジナルブランドとして家具と布製品を制作する石巻工房。布製品部門では、港町が多い被災地が再び大賑わいになるようにと思い込め込めトートバッグと、美しい布を組み合わせて作ったポーチが定番の商品として人気が高い。どちらも仮設住宅に住む南三陸の女性たちが作っている。最近では、伊藤君沖作品とのコラボバッグも登場。また、現在新たなテキスタイルを企画中とのこと期待が高まる。企画を担当する佐野恵子さんは「社会の中でデザインがどう役立てるか」という視点で、石巻工房での活動を通し、分業ではない「クリエイティブ内戦」の可能性に注目している。



BUONA PESCA・LL 4,725円 / L 3,675円 / S 2,625円
NUNO POUCH・2,625円 / AKI・CHU・TOTE 4,760円
通販: <http://store.shopping.yahoo.co.jp/ishinomakilab/>

【石巻工房】
宮城県石巻市中央2-10-21 サトミビルサトミビル1F左
TEL 0225-25-4839 <http://ishinomaki-lab.org/>

石巻工房ではデザイン関係者の支援の下、現地スタッフが「仕事としての運営を続けています。今後は、ものづくりに加え、人づくりやコトづくりなど、広く「+デザイン」が機能する場として継続していきます。

キャラクター紹介



くまさん
仮設住宅に1人で暮らしている。
無口で縁の下の力持ち。



天寿くん
お姉ちゃんを2人きょうだい。
勉強が得意。とくに天文。



メー・タロコさん
農家の嫁。異星人。
ピコ星からどうやって来たのかは
謎に包まれている。



お姉ちゃん
天寿くんの姉。小説を読めるが好き。
お父さんは漁師。

3.11後に生まれた ものづくりの輪その2

今回は、わわ新聞7号で取り上げた3.11後のゼロから生まれた「ものづくり」を再特集します。その後も各地で新たな商品が生まれ、また、目的を達成して次の段階に進む活動も。創造のチカラが尽きることはありません。

津波被害農地をコットンで再生する 東北コットンコレクション

津波により耕作が困難になった東北沿岸部の農地で被災農家が綿(コットン)を栽培し、参加各々が糸を紡ぎ、商品を作って販売する。農業から復興復興を目指すプロジェクト。地域の皆で収穫した「東北コットン」を素材にした、タオル、ストール、ポロシャツ、デニム、エプロンなどがラインナップ。

▶わたぐもタオル ミニタオル:630円

【株式会社KURUKU 東北コットンプロジェクト】
東京都渋谷区代々木1-28-9
TEL 03-5302-2043 <http://www.tohokucotton.com>

プロジェクト参加ブランドは、農家から買収した綿を使って、商品を作って販売していきます。東北コットンプロジェクトは、あなたがたくましくなる服などの商品と、被災地とあなたをつなげる支援の仕組みを作っています。

見事な綿花が
実りました。



さくさくの新食感！ 塩竈の藻塩 フラワーソルト

震災後早くから塩作りを再開した「合同会社順晴塩竈」の人気商品。塩竈沖の海水を2トンの釜で煮る。昔ながらの製法過程で偶然できる大きな結晶(一番塩の花)を採集めに、貴重な塩の結晶は大粒で美しく、ミネラル豊富でさくさとした食感。焼き魚、お刺身、ローストビーフ、焼肉、豆腐など、さまざまな料理に合う。

【合同会社順晴塩竈】
宮城県塩竈市港町2-15-9
TEL 022-367-6539 <http://www.masio.co.jp/>



▲塩竈の藻塩 フラワーソルト(60g版):650円

味わってください。
やさしい塩味です。

大船渡代表・伝統の味付け海苔 三陸味海苔缶

創業110年。現在は大船渡市の復興商店街「ゆめ商店街」に店を構える三陸海苔店のブランド商品。パリパリとした食感とオリジナルの味付けは、地元民馴染みの味。県外から来た人々からは、おみやげや贈答品としても人気。電話注文も受けています(送料別)。200枚入り。

【有限会社 三陸海苔店】
岩手県大船渡市大船渡町字茶屋前57-6 TEL 0192-26-4155

一度で賞味いただければ忘れられない一品にしたいと思います。
ごはんのお供に酒の肴に是非どうぞ。



▲三陸味海苔缶:1,680円

気仙沼大川流域で 育まれた穀物の焼き菓子 森のクッティー

クッキーのような食感を保ちながら、ビスコッティの固さを少しだけ加えた「森のクッティー」。人と人、人と自然、自然(森)と自然(海)のつながりを感じさせるやさしい物語を伝えるローカルブランドを展開し、可能な限り持続可能な復興のモデルに挑戦する森里海工房。気仙沼大川流域と東海岸沿岸部の魅力に注目し、森里海復興モデルとして、農林水産業の6次産業化に貢献する。

【特定非営利活動法人ピースチャラポ 森里海工房】
宮城県気仙沼市西青根133-7 <http://www.morisatoumi.jp>

※追加物。一切無用。安全安心な食料を使用し、ひとつひとつ手作りをしております。気仙沼大川流域産の穀物を活かした、サクサクの食感が特徴。私たちのお届けする「森のクッティー」は、自然のつながりの物語を少し感じ取って頂けると嬉しいです。



▲森のクッティー
(くるみ、黒蜜きなこ、ごま、紅茶):220円

石巻がまた花咲くように saki-pon(サキポン)

津波の被害で売り物にならなかった石巻の呉服屋の反物の裏地をスラブにして再活用したsaki-ponプロジェクト。saki-ponの売り上げは、制作者、販売手数料、呉服屋、材料費、現地管理団体にそれぞれ配分され、材料費や手数料などの諸経費を除いた純利益は全て石巻に還元される。

【Start!Tohoku Saki-pon project】
saki-pon.project@gmail.com <http://saki-pon.com>



▲saki-pon:大/1,050円、小/840円

1枚ずつ 糸から
織った 糸織物よ。



大漁旗の想いを受け継いだピアス 七福ピアス

「漁師さんから譲ってもらった貴重な大漁旗をアサマズことなく使いたい」。漁師への思いが込められた大漁旗に再び復興への想いを込めたピアスや帽子など、大漁旗を使った商品を作るプロジェクト。販路に出る切れ端や糸のクズを使った片耳用のピアス。色合いや風合いにひとつひとつ違いがあるのも味。

【funade studio】
宮城県石巻市中央1丁目4-3
TEL 0225-98-8683 <http://wasshoy-style.jp>

※結目丸の商品を見て頂き、ありがとうございます。震災以前に大切にされていた大漁旗がクズを変えて持ち手が変わっても大切にしたいように心を込めて作っています。その思いが伝われば幸いです。



▲七福ピアス:1,130円(送料80円含む)

キーホルダーの 売上で地域の交流スペースが完成 瓦Re:keyホルダー

震災を機に、北海道から岩手県陸前高田市に移住した田中源三を中心にはじまった「瓦Re:keyホルダー」プロジェクト。建設業から許可を取り、瓦葺の集落から集めたカラフルな瓦をチップ素材として瓦に染め付け、手洗いで汚れを落とし、カット、サリを掛け、角を落とし、さまざまな色やカタチを組み合わせている。活動や売上は、がれき処理、雇用、コミュニティづくりに役立っている。これまでの売上の一部をともに、2013年6月には、地域のコミュニティスペースとなるべく、念願の手作りのカフェをオープンさせた。



▲瓦Re:keyホルダー:600円
現在まで78,000個以上販売(2013/11月末現在)
※瓦葺処理費:約7800円 ※販路地域への還元金:7,800,000円以上(1個あたり約100円)

【ハイクラウドは人型人工(右)写真】
岩手県陸前高田市米崎町字腰の沢33-1 再生の里ヤルキタウン内
TEL 0192-47-5533 ラグジュアリー/11:00-15:00、ディナー/17:00-21:00、定休日/月曜日

※誰かの大切な生活の一部がキーホルダーになり誰かが持つ事で遠く離れていても震災を忘れないという思いを込めています。ぜひ大切に身につけて下さい。

復興支援プロダクト展示・販売 わわや 販売会レポート



東北各地の復興支援を目的につくられた商品をセレクト販売する「わわや」が関東・都内に販売会を行いました。雑貨から食品まで、取扱商品数はなんと約70種以上。訪れた人々は、種のある土地の商品や気になった商品を手に取り、その商品のさまざまな背景やつくり手の方々の思いを感じていました。気持ちもあつちなげに現地に行くことができない人、ボランティアで訪れた地域の今を気にかける人など、買い物とともに東北との関わりや、現地の現状に改めて目をつける機会となりました。

「わわや」は、わわ新聞を発行する「わわプロジェクト」が運営しています。出張販売会、地方パッケージ委託など承ります。ご相談は事務局までご連絡ください。

【お問い合わせ】
コマンドN わわプロジェクト事務局
TEL 03-3518-9101 info@wawa.or.jp <http://wawa.or.jp/>

【実施概要】
11月25日、26日 中外製薬工業株式会社・宇都宮工場
12月10日、11日 日本橋三井タワー

宮城県
仙台市NPO法人アスイク代表理事
おおはしゆうすけ
大橋雄介 さん困難な環境にある
子どもたちに
学習環境をつくるすべての子どもが
希望を持つために

大橋雄介さんは東日本大震災後、学校に通えなくなった避難所の子どもたちに勉強を教える場を作ってきた。初めは無気力に見えた子どもも、大学生のボランティアなどと勉強をするうちに瞳の輝きを取り戻していったという。しかし、活動が仮設住宅などに移り、徐々に日常を取り戻される中で、大橋さんは問題の本質に気付かさ

れたという。

被災前から困難な家庭環境にあった子どもたちが被災によりさらに困窮していること。また、被災の有無によらず、所得と学力、進学状況には明確な関係性があるということ。

そこで大橋さんは、「全ての地域で家庭環境による学習格差が生まれないようにする」とをミッションに掲げ「まなびサポーター」制度を創設。子どもたちに放課後の学びの場を作るサポーターを募集し、研修を行ったり、パソコンを使った学



アスイクの支援により運営されているまなび場の一例。子どもたちの話を聴く時間が何よりも大切。

大橋雄介

1980年生まれ。NPO法人アスイク代表理事。コンサルタントとして独立後、市民活動の先駆者である加藤哲夫氏と出会い、ソーシャルビジネスの起業支援やネットワーク形成プロジェクトを担う。震災発生直後にアスイクを設立。著書に「3・11被災地子ども白書」(明石書店)等。

【連絡先】NPO法人アスイク

〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡5-3-21
コーポ小松101 <http://asuiku.org/>宮城県
手島
岩宮福NPO法人ETIC 右腕派遣プログラム担当
やまなか たすく
山中資久 さん5年10年後も
挑戦する人が
集まる東北へリーダーを支える
右腕“を派遣”

震災後、復興を力強く推進する若手層の深刻な人材不足。この問題解決に取り組むのが、東京に事務所を置くNPO法人ETIC(エティック)だ。ETICは震災直後から彼らの強みである人材コーディネートノウハウを活かした「震災復興リーダー支援プロジェクト」に取り組んでいる。

中でも注目すべきは、住民主

体の自律的な復興を目指すリーダーのもとに「右腕」となる人材を派遣する「右腕派遣プログラム」だ。この事業は、これまで被災3県の99のプロジェクトに179名もの人材を派遣し、各地で復興を加速する力となっている。

担当の山中さんは、現地リーダーの希望と右腕希望者のスキルをマッチングさせ、びったりの「右腕」を現地へ送り出す役割。「慣れるまでは、リーダーがどんなことをしたいのか、どんな人が必要なのかを咀嚼し



右腕募集する「みちのく仕事マッチングフェア」。今回は3月2日(日)に、東京で開催。

山中資久

慶應義塾大学(SFC)在学中まちづくりや環境NPOの立上げに参画。卒業後、広告代理店に就職。新規事業、イベント企画等担当。2011年ETICに転職。

【連絡先】NOP法人ETIC

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階
<http://www.etic.or.jp/>

て伝えるのが大変でした。震災後、今の働き方や生き方に疑問を感じていた人が右腕として東北に行き、目を輝かせ地域を飛び回っている姿を見たとき、このマッチングができて本当に良かったと実感します。」

3・11からもうすぐ3年が経過する今、右腕に応募している人は少なくはなっているが、熱意を持った人たちがより多くなっているという。最近では、宮城、岩手に比べ少し遅れ気味ではあった福島でも、様々な動きが出てきているとのこと。

今後の課題を伺うと「これから東北の復興に携わりたいという人は目に見えて減っていき、今後は復興という文脈にかかわらずユニークなリーダーや面白い事業などを魅せることで、東北に関わりたいという人達をどう増やしていくか重要な課題です」と答えてくれた。「10年後もチャレンジする人が集まる東北」を目指す彼ら。そして彼らに背中を押された熱意ある右腕たちが明日の東北をつくっていく。

— 東北記録映画三部作 完成記念 —

『うたうひと』が
生まれるまで

小野和子(みやぎ民話の会)



死で四人とも先立ったというのです。お会いしたときは、遠い血筋に身を寄せて、縁側に一人用のプロパンコンロを置いて煮炊きする暮らしでした。

わたしは立て続けに三回訪ねました。三回目、別れを告げて帰るとき、横長の本を一冊出してきて、わたしに渡されたのです。擦り切れた表紙に「赤穂義士誠忠書鑑」とある古い絵本でした。貧しくて小学校にも行けなかったその人は字が読めないのです。本と名のつくものはこの一冊があるばかりだとい、「おれの話を聞いてもらってうれしかった」と涙ぐまれました。それが最後になったあの日、老嫗は縁側に正座して、本を抱いて帰るわたしに深々と頭を下げられたのです。

以来、わたしはその本を携えて、語つてもらった民話を紹介し、その人生を語り続けてきました。民話を語る人はかならず語つてくれた人——死者を語ります。死者への思いがあるから「言葉」は生命をもち、昔と今をつなぐ無限の「未来」を生きているのだと思います。

東日本大震災のあとに、明治十五年生まれの方でした。十六の歳に山ひとつ越して嫁ぎ、二十八で夫に死なれたといいます。すでに男の子ばかり四人いたそうです。けれども、難儀して育て上げた息子たちは、戦争を挟んでの戦死病

した。そして、このお二人に、震災の年の八月に、南三陸町で開催した「第七回みやぎ民話の学校」(みやぎ民話の会主催)の様子を映像で記録してもらうことになりました。被災した沿岸地域には、かつて民話を語つていただいた方がたくさんおられました。その消息を訪ねるなかで、癒やし難い傷を負った語り手たちから、「形あるものはすべて無くしたが、気がつけば胸に民話が残っていた」という尊い言葉を聞きました。

その言葉に励まされて、民話の語り手六名に被災の体験を語ってもらう「学校」を開いたのです。二百人の参加者を迎え、語り手たちはまるで民話を語るように、苛酷な「あの目」を語つてくださったのです。学校開催に先立って、語り手を訪ねて打ち合せをする段階から、監督たちは参加されました。カメラを持たず真摯な聞き手としての同行であったことが心に残っています。

画監督の第一作「なみの」と「に描かれたのは日常的な風景を背景に、「あの日」をしずかに語る被災者の声と、時折、発せられる問いによって構成された画像でした。次の作品「なみのこえ」も同じような手法で撮影がすすんでいました。それは、切実な現実を背負って、なお明日を生きるために紡ぎ出される物語の

群れ——民話の世界に深く重なる様相を見せて、ふしぎな時空を形成していました。東北記録映画の三本目として「民話の語り」を映像で撮りましょう」と、監督お二人からいつてもらったのです。わたしは喜んで、それぞれに二百話近くを伝承する貴重な語り手三名を選んで、すぐにその「語り」を、二度二度と撮ってもらいました。二話でも多くの伝承話を残すことに、わたしは性急でしたけれども、画監督の意図がそこにはないことに気づいたのはしばらくしてからでした。

語られる民話そのものの記録も然りながら、「語り」の影の存在ともいえる「聞くこと」こそ、「語り」聞く」という営みの本体が在るのではないか、そこをこそ撮りたいのだ、というのがわたしの胸を衝かれました。「うたうひと」という映画はこうして生まれました。カメラと二人の監督の存在がそこであって、語り手と聞き手は、透明であたたかい空気につまねながら、手を取り合つて「物語の世界へと入っていったのです」。

*映画パンフレットより転載

小野和子(おの・かずこ)

1934年岐阜県高山市生まれ。1958年より宮城県仙台市在住。東京女子大学日本文学卒業。1970年から宮城県を中心に東北地方の民話探訪活動、民話集の編集・編纂に従事。みやぎ民話の会顧問。日本民話の会会員。1993年宮城県児童文化おてんとさん賞受賞。2004年地方教育行政功労者文部科学大臣表彰。

『なみのおと』 2011年、142分
<http://silentvoice.jp/naminooto/>『なみのこえ 新地町/気仙沼』
2013年、103分[新地町] 109分[気仙沼]
<http://silentvoice.jp/naminokoe/>『うたうひと』 2013年、120分
<http://silentvoice.jp/utawohito/>

【自主上映のご案内】

「なみのおと」「なみのこえ」「うたうひと」の自主上映会を各地で開催して下さる方を募集しております。個人サークルや、趣味の仲間同士、子供会などでの上映を希望される方などの活動も積極的にサポートもさせていただきますので、お気軽にご相談ください。料金、お申込み方法はwebサイトかお電話にて。 <http://silentvoice.jp/utawohito/download/>

【東北記録映画三部作パンフレット】

三部作の解説、関係者による寄稿エッセイ、インタビューなどを収録するパンフレットを販売しております。(900円税込)。三部作をより深く鑑賞できるおすめの一冊です。
◎寄稿：甲斐賢治／結城秀男／小野和子／山田 創平／Werner Penzel／齋田清一／酒井耕／濱田竜介
◎インタビュー：市山尚三

【問い合わせ】

一般社団法人サイレントヴォイス[担当：相澤・蒙瀬(やなせ)宛]
〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6
TEL 03-3584-0286 FAX 03-3560-2047
E-MAIL info@silentvoice.jp

宮城県
気仙沼市

マルトヨ食品株式会社

清水浩司 さん
しみず こうじその先の10年を
目指して考える、
製造業の役割阪神大震災の被災者
から学んだ教訓

震災後、マルトヨ食品の再建に奔走していた清水さんは、縁あって阪神大震災で大きな被害を受けた神戸市東灘区の商店街を訪問した。「なんて綺麗が全く見当たらない神戸の町並みに、溜息が漏れた。清水さんが震災直後の気仙沼の様子を話すと、神戸の商店主たちは涙をにじませ聞き入った。「あん

く地元の製造業者が少なくない。味やパッケージを検証し、欲しいと思うデザインを追求する。変化する状況に合わせて、自分たちも順応して行くしかない」と考え、そこにチャンスがあると前向きに捉えている。

震災後は、積極的に東京や県外の催事に出展し、お客さんの言葉に耳を傾けるようになった。県外では特に、社名ではなく「気仙沼の清水さん」と呼ばれる事に最近気づいた。「地域ブランドの確立と言うと難しい話に聞こえるが、実際はもつと



震災直後は、製造機械が全滅したため、創業当初と同じ天日干しでみりん干しを生産した。

清水浩司

1965年生まれ気仙沼市出身。水産加工会社「マルトヨ食品」取締役営業部長。昭和27年創業の同社は、気仙沼で水揚げされた魚を使ったみりん干しや一夜干しを製造し、全国に販売している。

【連絡先】マルトヨ食品株式会社
〒988-0007 宮城県気仙沼市中みなと町131
TEL 0226-22-2058

海外だからこそ
出来る
支援のかたち英国
ロンドン東北支援団体タープ・ロンドン
(TERP London)下濱 愛 さん
しもはま あいロンドンと
東北をつなぐ

イギリス在住の日本人有志によつて結成された東日本震災の復興支援グループ「TERP LONDON」(タープ・ロンドン)。「震災直後の2011年3月下旬、在英の日本人起業家が発起人となり、活動がスタートした。現在は、ロンドン在住の下濱愛さんが3代目の代表を務めている。

支援の継続を目標に掲げており、その活動は多岐にわたる。下濱さんは活動1年目を「私たちに出来る事は何でもやってみよう!」というスタンスで、震災の写真展の企画やチャリティイベント出展などアイデアを形にする事に奔走した」と振り返る。2年目は、イギリス各地で支援活動を行う人たち同士の繋がりを広げ、支援者のためのプラットフォーム機能を充実させたという。3年目は、東北沿岸部で立ち上がった被災地の事業者に対し、イギ

リスで商品を販売する為の支援を開始した。東北の生産者と、イギリス国内に販路を繋ぎ商流を構築。現在は、海外展開のマーケティング案について東北の生産者へフィードバックを行うためのワークショップを企画している。今後は、イギリスから日本への一方だけでなく、被災地からイギリスに向かう、双方向の流れに展開させることを視野に活動している。

「日本で支援というと、手弁当で減私奉公するイメージがあつて、関心はあつても躊躇している人が多いんじゃないでしょうか」という下濱さんは、チャリティ文化が根付くイギリスの良き風習を日本に還元させたいと考えている。困っている人に向け、労力やお金を提供する事は当たり前で、誰かが肩肘張らずに自分の出来る範囲の手助けを行う敷居の低さが、活動の裾野を広げている。「ロンドンだからこそ出来る事が何かを考え、形にしていきたい」。



支援者同士の交流の場、「ボランティアパブ」を定期開催している。

下濱 愛

1979年生まれ、ロンドン在住。現在、在英金融機関に勤務の傍ら、東北支援団体タープ・ロンドンの代表を務める。

【連絡先】東北支援団体タープ・ロンドン(TERP London)
info@terp-london.co.uk
http://terp-london.co.uk/
(Facebook)
http://www.facebook.com/TERPLondon

冬の風邪
予防と対策

シブヘルスケアファーマシー
東日本株・教育研修部、薬学博士／川村和美

さまざまな
風邪の症状

冬は最も風邪を繰り返す季節です。今回は、風邪の予防対策と風邪を取り上げた場合の対処法を振り返りたいと思います。そもそも風邪とは、どのような病気なのでしょうか?

ウィルスの
特徴と予防法

すると耐性菌が出現し、いざというときに抗生物質の効かない身体になってしまうことが危惧されて、風邪に抗生物質が処方されることはなくなりました。(日本呼吸器学会「成人気道感染症指針2004年5月改訂版」に「風邪への抗生物質はできるだけ控えるべき」と明記)

風邪に効く
薬って?

ウィルスが原因で気道の炎症が引き起こされ、咳、のどの痛み、鼻みず、鼻づまり、発熱、頭痛などが起こる状態を「風邪」、正式には「風邪症候群」といいます。風邪のウィルスは200種類以上あり、消化管のウィルス感染によつて、嘔吐、下痢、腹痛などの腹部の症状が現れる「感冒性胃腸炎(胃腸かぜ)」と呼ばれるものもあります。

マスクの
役割と効果

マスクの着用については、微粒子濾過効率を大きく謳った高価なマスクが発売されていますが、マスク自体がどんなに微粒子を通さなくても、顔とマスクとの間には隙間ができるものですから、マスクの効果を疑問視する意見もあります。また、高い製品だからといって、何日間も汚染されたマスクを使っていたのでは本末転倒です。ウィルスを通さないことよりも、マスクには鼻粘膜や喉の乾燥を防ぎ、ウィルスの増殖を抑制するというメリットがあることに間違いありません。

受診すると何種類もの薬が処方されますが、この中に風邪の原因であるウィルスをやっつける成分は入っていません。鼻みずが出ていれば鼻みず止め、熱が出ていたら解熱剤...というように、風邪の諸症状を抑える薬が出されます。昔は風邪薬として抗生物質が処方されていましたが、細菌をやっつける抗生物質では風邪の「ウィルス」をやっつけることができないということ、そして、安易かつ繰り返して抗生物質を使用

次に、喉に付着したウィルスを気道まで到達しないようにすれば、風邪症状に悩まされることはありません。つまり、頻繁なうがいはいは最も効果的な対策です。喉がいがらついたり、少し痛い感じがする段階で、繰り返しうがいを心がければ、喉に付着したウィルスが身体の外に出され、増殖しづらくなります。さまざまなうがい薬がありますが、うがいは水道水で十分効果的だと言われています。(爆笑問題のニッポンの教養「File090 新型コロナウイルスの真実」2009年11月3日放送、東京大学医科学研究所の河岡義裕教授談)



